

第2部 大学院修了生聞き取り調査結果の分析・考察

1. 聞き取り調査結果の要旨

大学院修了生を対象に実施した聞き取り調査結果の詳細な内容と分析結果については次項以降で示すが、ここではその要旨を以下に紹介する。

1) 大学院進学の動機について

大学院に進学を決めた動機についての聞き取り調査結果としては、主なものとして以下の3点があげられた。

1つは、大学院で学んだことを現場に活かしたいという思いから進学を決めたというものである。「現場の状況について学問を通して見つめなおしたい」「現状改善の糸口が見つかるのでは」と言った言葉で語られた。

2つめには、何かを学びたいという漠然とした学習意欲を強く持ち、進学を決めたというものである。

3つめには、学位を取得することで、転職やステップを測りたいという目的・目標をもって進学を決めたというものである。

2) 大学院での学び（研究）の成果

大学院で学んだことで得た成果としては、主なものとして以下の3点があげられた。

1つは、自分の分野とは違う分野の人とのつながりが持てたということである。院生同士はもちろん、教員とも接点ができ、人脈が広がり今の仕事に役立っていると感じている。いざという時に助けてもらえる人や違う視点で物事をみる人とのつながりができたことを、成果として評価している。

2つめには、修士論文の執筆やゼミでの討論を通して、根拠をもって話をするできるようになった、説明する力がついたと感じていることである。この点は、アンケート調査結果で把握されたことと共通している。

3つめには、自分が置かれている状況や現場のことを客観的に見るできるようになったことである。違う立場の人たちとの意見をまとめることができるようになった、理論と実践をつなげて考えることができるようになったといった言葉で語られた。

3) 大学院教育への期待

これからの大学院教育に期待することとしては、主なものとして以下の3点があげられた。

1つは、大学院教育を通して現場を変えられる力が身につけられるようにして欲しいというものである。高度な専門職の養成を大学院に期待しており、組織のトップに立ちマネジメントできる人材養成をして欲しいという意見などである。

2つめには、大学院における学ぶ環境についての期待である。教員による指導機会を充実して欲しいという指導環境のことや、図書館や情報環境といった物的な環境整備の充実をのぞむ意見がみられた。

3つめには、大学院修了後も大学院と関係を持ち、学びや研究の継続、教員や修了生同士のつながりがもてるようにして欲しいという意見である。

4) 聞き取り調査結果の概要（調査対象者・聞き取り項目別の集約表）

聞き取り調査（対象 15 名，A～O と呼称する）の概要を以下の 4 つの表に集約した。

① ヒアリング対象者 A～D

ヒアリング対象者	A	B	C	D
属性	50代 女性 起業家・ケアマネージャー	50代 男性 経営者	60代 男性 無職	40～60代 男性 教育職
動機	* 動機について言及なし	・ 経営トップの方針と退職	・ 退職後に自分がやってきた仕事を振り返りたかった ・ 学問の目を通して、現場の状況を見てみたい	・ 心の動きを学びたかった
成果	・ 修士論文の執筆を通して訓練された ・ 根拠を持って話ができる癖をつけることができた ・ 現場ではできない理論的な話ができる仲間ができた ・ 研究を通じて知り合った人とのネットワーク ・ 関わった人、交わした議論が自分の中で蓄積されて基礎になる ・ 現場がみえやすくなった ・ 自分の姿勢がブレないでいられる自信がついた	・ 地域福祉、社会貢献という考え方に影響を受けた ・ 経営と学びのジレンマ ・ 発想の転換を試みること、だが現場には理解してもらいにくい	・ 理論的な考え方、深くみることができるようになった ・ 説明する力が身に付き、表現の仕方が変わった ・ 問題点や矛盾点を明確に認識することができるようになった	・ 生徒との良好な関係を構築することができるようになった ・ 違う環境に身を置くことで客観的にみることができた
大学院への期待	・ 履修できない講義があった（時間割への配慮） ・ 「高度な専門性」を身につけることで現場が変化するイメージ	・ 経営視点と人材活用をテーマとした講義 ・ 経営主体を比較した福祉経営論が学べるように ・ 入学準備に関する情報提供 ・ 事前学習の機会があるといい ・ 社会人が現場で抱く疑問を解ける場としての大学院といったイメージが必要 ・ 職種に応じた気軽に聴講できる機会	・ ディスカッションできる場として ・ 自主ゼミ等の立ち上げなど教員からの初期段階の助力 ・ 大学院のイメージが具体的につかめるような宣伝を ・ 福祉の現場で悩んでいる人のための勉強会 ・ 大学院が現場の勉強会などに関わる ・ 実践する上でも研究する上でも修了生を活用し、互いに蓄積していく	・ 通学負担を考えると通いやすさが大切 ・ 先進地や実践者から学ぶ機会があってもよかった ・ 資格取得ができるカリキュラムを ・ 高度専門職として、世間にアピールするものが必要 ・ 大学院での2年間で土台にしてステップアップできる研究会やシステムがあるといい（定期的に） ・ 修了生を資源や教材としてとらえ、引き止めておく仕組みを考えてほしい

② ヒアリング対象者E～H

ヒアリング対象者	E	F	G	H
属性	50代 女性 福祉職	50代 男性 公務員	30代 女性 ケアマネジャー	40代 女性 起業家・ケアマネジャー
動機	何かを勉強したいと思って来た	* 動機について言及なし	- 大学の先生から大学院進学への勧め - 大学のときの勉強不足もあり、新たに勉強したかった - 経験的なものを形式知にという漠然とした思い - 自分の立場から学ぶ	- 業務の中での壁にぶつかってしまった - マネジメントを教えてもらえるところだと思っていた
成果	- 自分の仕事とは、関係ない分野の講義 - 教員の姿から学んだこと - 違う方向からの情報で、世界が広がった - 違う分野の人たちとのネットワークができた - 文章を書く力 - 論文を書くことを通して学んだ流れが、仕事の中でも役立った - まとめる力が前より身に付いた	- 近接領域の専門職の視点や用語の違いを知ることができた - 文章の書き方、言葉の使い方 - 観察することの客観性、具体性を実習生や部下に指導しやすくなった 「お互いの通訳ができるような立場」に立つことができた - 分析的な意識で具体的な事実を正確に記録する	- ゼミを通して獲得できたものが多い - 違うものの見方など素直に捉えることを学べた - いろいろな視点の持ち方 - ピアレビュー等、お互いに支えあえる仲間ができた - 文章を書く力が向上した - 客観的なものの見方 - 相手に合わせた伝え方	- 根拠を示すことができる力 - 周りの人を頼ってもいいということが実感できた - 理論と実践をつなげて理解する力 - 違う視点で物事をみる人たちとの接点
大学院への期待	- まとめる力を身に付ける - 現場とは、違った場で学ぶ意義 - 組織のトップを担う人材を育成する場として - オールマイティな、教養や知識を身に付けるプログラム - 修了後も刺激を受け続けることができる場	- 書籍が貧困 - ゼミなどの機会に討論する時間、ロールプレイする時間をつくる	- 現状と少し違ったものを得る場として - 門戸を適度にひらき大学院で学ぶことができる機会を提供（前向きに大学院に行ける要素）する。	- 個々の学びたいという気持ちの発掘 - ネットワーク作りの場として

③ ヒアリング対象者Ⅰ～Ⅳ

ヒアリング対象者	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
属性	60代 男性 福祉起業家	50代 女性 医療福祉職	40代 女性 相談員	50代 女性 教員
動機	- 介護事業所の設立のため、理論を学びたかった - 同業以外の分野の人とのつながりをもちたかった	広い視点を持つ自分になることで役立ちたい	- 漠然とした学びたいという気持ち - 自分の仕事を見直してもう少しいい形で展開させ、安定させたい	- 大学教員の誘いがあり、学位取得が必要だった - マネジメントに興味があった
成果	- 事業を開く前にいろいろなことを知ることができた - 理論と実践がつながった - 利用者が抱える潜在的な問題に気付くことができた - いろいろな分野の人と出会い、今の事業に役立っている - 人脈の広がりにつながっていく - 事業所母体による認識相違を実感した	- 実際に現場で役立つという、大学とは違った学び - 論文を書くという経験 - 異分野の人たちとの接点 - 教員とのつながりと活用 - 自分の分野を客観視できる視点と周りの目 - 仕事をしていくときに他の分野の人とうまくできる	- 先生から、率直に違うという指摘をいただくことができた - 研究に取り組む姿勢 - いろいろな分野の人とつながりや情報を得る機会がもてた - 冷静に先をみる視点	- 研究の作法を学んだ - 根拠を示し相手の納得を得られる力 - 分かりやすく説明し、方向付けをする力 - 調査の大変さを学んだ - 学部からの進学者は、社会人とのつながりができる（縦の人脈） - 自分と違う目線、考え方を教えてもらった
大学院への期待	- 心情的理解を超えるものを学べる場として - 専門用語や英語が多くて分からない人の不安緩和のための工夫（用語解説など）	- 博士課程に行かなくても、修士課程で学んだことがプラスできるように - 医療的な分野の不十分さ - ネットワーク作りの場として	- 全体を総合的にみることができる力の取得 - 大学院で学びたいという気持ちの個人差をつかむ - 現場（職場）の大学院に対する理解と認識 - 個々のレベルに合わせたカリキュラム - 大学院に足を運べるような環境整備 - 修了生を大切に	- 指導教員の指導姿勢の特性と指導の定期化を - 修士論文の指導システムができていない - 定期的な指導機会の確保が必要 - 現場の需要と直結したものを - 在院生だけではなく修了生も対象にした企画

④ ヒアリング対象者M～O

ヒアリング対象者	M	N	O	
属性	50代 女性 公務員	50代 男性 教員	50代 女性 PSW	
動機	論文を書き上げる	- 研修プログラムの幅をひろげるための勉強 - 仕事にふくらみをもたせることができるかという期待 - 半分は、職場からの業務命令	- 講習に参加して再学習の意欲が高まった - 海外の研修会で刺激を受けた - 実子の育児負担が軽くなった	
成果	- 福祉職ではないため、福祉のいろはの部分から講義がためになった - 自分の研究以外の部分でのやりとりをゼミを通してできた - 福祉の人たちとのつながりができた - 論文を書くプロセスを通していろんな意味で学びが多かった - 人の意見を聞くことができるようになった - 相手に伝えられる力を得た	- 教授法やレジュメの作り方が参考になった - 刺激になった	- 学びやすいカリキュラム - 論文の書き方のいろはを学んだ - これまでは経験主義で仕事をしていたため大学院の修了でスタートラインに立てた - 質が変わったように感じがあり、それが学生指導に役立っている - 人脈が広がった	
大学院への期待	- 時間的な制約の中での学びの限界 - 教員との接点と議論を深めるための仕組みづくり - 図書館など環境的な配慮	- 研究方法が身に付いたかという疑問 - 端的な指導と論文プロセスを教育するプログラム - 福祉の現職者をターゲットとした講義（焦点をしぼる） - 実践の検証方法を充実し、教育するべき - 学んだことを現場に還元できる職員育成の場としての大学院教育 - 論文執筆にあたり、明確なゴールの設定を - 記録をテーマにした研究会	- さまざまな専門分野にわたる教員をPRする - ワークショップなど集中できる学びの形態 - 整理、説明ができる専門職の養成 - 研究生制度、修了した人へのPR	

2. 聞き取り調査結果の分析

1) 聞き取り調査の概要（調査の目的と方法）

本調査の目的は、第1部で行った日本福祉大学大学院 GP のアンケート調査の定量的データを、同修了生への聞き取り調査によって質的側面から補強し、「福祉現場と大学院の循環システム」構築に関する基礎資料をリアリティあるものとするものである。

調査項目は、アンケート調査と同じ「大学院進学の動機・成果・課題」とした。

調査対象は、社会福祉学研究科福祉マネジメント専攻の修了生を修了年度ごとに無作為に50名抽出し、その50名に往復ハガキで調査依頼をし、協力回答があった15名の修了生を対象とした。

聞き取り調査は、2009年1月31日及び2月7日、本学名古屋キャンパスで個別に対面式で行った。大学院教育評価に関する調査項目が含まれるため本学教員は調査員とならず、他の修了者7名にリサーチアシスタントとして聞き取り調査員を依頼した。



－聞き取り調査の様子－

※(注) 89～100 頁に掲載している写真とその頁の調査結果とは関係ありません。
また、写真の掲載について、ご本人の了解をいただいています。

2) 聞き取り調査結果の分析

① 被調査者 Aさん

1. 大学院進学の動機

※動機について言及なし。

2. 大学院での学び（研究）の成果

修士論文の執筆は説明力を身につける訓練

論文を書いたためか、人に何かを伝える時、根拠を持って話しができる、そんな癖がついたと思う。「こうだからこうなんだ」という説明ができるようになった気がする。ただ、人がどう思っているかは別で、自己満足かもしれない。これは自分で模索しながらも、修士論文を書く過程で、いろんなことを教えていただき、訓練されたことが影響しているのだと思う。

理論を交わせるつながりができた

ゼミでは、先生方の話や同期、先輩との交流により、現場ではできない理論的な話ができる。大学院で話をすることと、現場で話すことにはギャップがある。職場で話さない（できない）のは「何、言ってるの」とか「あんたの言うことわからん」みたいな雰囲気があるから。（大学院を修了して）理論的な話ができる仲間ができた。そういう話ができることはとてもうれしかったし、充実していた。

研究を通じた人脈の広がりや蓄積

研究のため自分でフィールドへ出向いた。同じゼミ生もそうだが、研究を通じて知り合った人とネットワークができていく。友達の輪が広がっていく。どれだけいろんな人と関わったか、そこでどれだけ議論を交わしたか、といったことが、自分の中で蓄積されて、現場や何か行動を起こす時の基礎になる。

現場の状況認識とブレのない姿勢

大学院で学び、現場の背景というか、いろいろな方面から見えやすくなった。仕事をすると、自分の姿勢がブレないでいられる自信をもった。それは利用者との関係の中でも反映できる。

3. 大学院教育の課題

学費

学費は月々にすると10万円弱になる。大学院進学を考える人はある程度、準備やストックが必要。ただ（金額が）高い、安いではなく、それだけの覚悟をして、元をとるぐらいの気持ちが必要。

履修できない講義

受けた講義はあったが、（社会人のため）時間の制約とか、専攻コースによって受講できない科目があった。

「高度な専門性」とは何か

「高度な専門職」とは何をもって高度というのか不明だが、高度な専門性、高度な技

術を身につけることで、現場が具体的に变化するというイメージでしかとらえられない。私の場合は自己満足で終わっている。

4. 小括

Aさんは、根拠を示した上で理論だった説明ができるようになったと述べる。修士論文の執筆やその途上における指導がこうした力量を育んだと自己分析する。論理的な思考は、大学院仲間とのつながりを生み、人脈拡大にも功を奏しているようである。

しかし、習得した説明力や「理論」によるつながりは、職場には及んでいない。「理論的な話ができる仲間」とは、大学院の院生仲間や研究を通じて知り合った人々であり、職場では距離をとられた関係、疎外された関係をうかがわせる。

理論を交えた会話が職場で困難な要因を発言内容から探ることはできないが、「ブレない姿勢」との認識からわかるとおり、少なくともAさんは周囲に迎合しようとはしていない。

大学院教育の課題の一つに「学費」を取り上げたAさんは、その高低額を問題にしているのではない。おそらくAさんにとって自己投資という意味なのであろう。そしてその成果は自身の姿勢にかかっているという認識をもつ。しかし科目履修の制限を課題ととらえ、履修可能な科目の拡大を望んでいる。「覚悟をして、元をとるぐらいの気持ち」を強調するAさんの価値観からすれば、一定の理解はできる。さらにそれは大学院教育の質とも関わる「高度な専門性」が不明確な面にも及んでいるようだ。



－聞き取り調査の様子－

※(注) 89 頁に同じ

1. 大学院進学の動機

経営トップの方針と退職

大学院に入学したとき、すでに高齢者と障害者を利用対象者とする社会福祉法人で役員を勤めていた。在学中、経営トップの交代があり、前トップの親族が新たに就任した。新トップは非採算部門の完全整理を方針として打ち出し、その整理によって発生する剰余金をトップの待遇に充当するという話が出た。「私利私欲というものが強く出てきたことによって、自分の生活もあつたんですけども」退職を決意しました。

大学院の学びで脱施設化の方向があることを知り、またこの法人とは別に介護保険の会社経営をしていたこともあって、そこに席を移すことにした。

2. 大学院での学び（研究）の成果

地域献身という姿勢

経営トップの方針とそぐわず退職意向を示した職員のうち、35人を自分の会社に引き抜いて雇い、あわせて事業を拡大した。自分は新事業会社の社長に就任した。

大学院での学びの中で、地域福祉とか、社会貢献といった考え方に影響を受け、例えば、中古レンタルベッドを地元に寄贈するなどの活動を行った。こうした考え方は重要だと思ふ反面、事業経営とそぐわないところも出てくる。

経営と学びのジレンマ

新事業の開始当初、優秀な人材がいてありがたかったが、赤字をかかえながらの経営だった。赤字解消には5、6人を解雇すれば採算がとれるが、それはできない。

地域ケアを考える中で「ケアプランは命」だと考えていて、地域の事業所100社くらいと取り引きがある。これも地域貢献の一つだと思うのだが、本当は自社でケアプランを作った利用者は自社のサービスを利用してほしい。自社のケアマネジャーは優秀であるが、公平公正の視点から自社サービスの利用促進には積極的でない。プラン作成の利用者のうち、3割ぐらいが自社サービス利用者であるのが現状。

発想の転換を現場が理解することの困難

従業員に一番わかってほしいのは経営的な考え方。貸借対照表や損益計算書から見れば、削減できるところは人件費しか残っていない。それは従業員も理解しているが、働く側の人間としては認めにくい。それがわかるものだから、経費削減から発想を変えて障害者を対象とした半日デイサービス（4時間）を開始し、残った時間を支援費制度（障害者自立支援法に基づく生活介護事業のことか？）として実施しようということにした。すでに地元の親の会などが展開しているが、事業の地域展開を考えてもいいことだろうと思った。しかし、現場の意見は、さまざまな障害種別の人を受け入れるのは、現場の能力を超えるものだった。介護事業者が地域を向いて事業展開したり、生涯種別に関わりなく受け入れるのは理論的には理にかなっているはずだが、理解してもらいにくい。

経営視点と人材活用をテーマとした講義

福祉経営について社会福祉法人だけでなく、ケア会社やNPO法人などの経営についても学びたかった。どのように効率化を図るか、といったことが現状に即して学べると

よかった。

また経営者としては人を活かすというところに力点をおいた講義内容がほしかった。スタッフのスキルアップの方法や従業員の人間関係の構築などは、福祉経営に関する組織論として必要なのでは。

経営主体を比較した福祉経営論を学びたかった

以前、勤めていた社会福祉法人では、理事長が多額の月給をとっていた。介護保険制度がはじまったことで、利益創出が認められるようになったが、それは事業の質の向上や従業員の待遇に還元されていないと思う。社会福祉法人と民間企業による福祉経営を択一的な是非論ではなく、比較論として扱う講義がほしい。そうした学びは福祉経営者を育成することに役立つと思う。

3. 大学院教育の課題

入学準備に関する情報提供を

学部卒業後、ずいぶん月日が経過してから大学院に入学する社会人が多いと思う。長年、学びから遠ざかっていると、学問というものの距離が生まれる。するとまず入学前の準備、例えば「研究計画書」などの書き方もわからず、準備に時間を費やしてしまう。同期の人の中には、科目履修生を経てから入学したり、通信教育である程度学んでから入学した人もいるが、私にとって研究計画書はハードルが高かった。研究計画書の書き方を載せた書籍も購入したが、難しいことが書いてあるだけだった。

そういうものが要だということや、どうすれば書けるかといった事前学習の機会があるといい。あるいは研究計画書に変えて入学動機書でもいいかもしれない。

大学院のイメージを緩和する

学部生の頃、大学院といえば腰を抜かすほどタイハードルだった。業務経験を積んだ社会人でエキスパートの人でもそうした大学院のイメージは残っていると思う。だから「研究」と言われると躊躇してしまう。だから社会人が現場で抱く疑問を解ける場としての大学院といったイメージが必要。それが「研究」だと言われればそれまでだが、職種に適した気軽に聴講できる機会がほしい。

4. 小括

Bさんは社会福祉法人を退職し、自身が福祉経営者となった後に大学院に入学した。その動機について明確な回答はなかったが、何かしら期するものがあつたことは、後のインタビュー内容からうかがうことができる。Bさんが大学院で学んだことは、実践に活かされていると同時に、ジレンマの元凶にもなっているようだ。それは自社経営の安定と従業員に対するもどかしさといったものに表れている。それゆえ、学びの成果を尋ねた問に対し、成果ではなく大学院に望むことを回答している。回答は福祉経営者の実践視点として一貫している。それは大学院教育の課題にも通じている。Bさんは現場で発生する様々な疑問に答える場として大学院をとらえていることがわかる。

1. 大学院進学の動機

退職後に仕事を振り返る

福祉事務所でケースワーカーをしていたが、大変な仕事だった。ワーカー1人あたりが担当する妥当なケース数はあるが、実際は倍以上を担当するのが現実だった。残業も多かった。量的な大変さに加え、対象者ごとに異なる質的な大変さもあった。生活保護の場合、他法優先原則があるが、アルコール依存症や精神疾患をもつ者など、関係法規は複雑で多岐にわたる。仕事に対してストレスもたまる。また職場の体制や保護の適正実施のもと、実際は締め付けとも思える指導もあり、疑問を抱えながら仕事を進めることが日常だった。それらが重複してストレスを増大させる。こうした状況を学問の目を通して見てみたいと思った。

大学院の入学時にはすでに退職していたため、キャリアアップや業務能力の向上、ましてや教員志望といった動機ではない。自分がやってきた仕事を外観してみたい、振り返ってみたいということだった。

2. 大学院での学び（研究）の成果

論理的な考え方、表現

修士論文を書いたことで、自分なりに理論的な考え方ができるようになったと思う。日ごろのものごとの見方が理論的になったというか、少し深く見ることができるようになった。

退職後に自治会活動をしているが、論理的に物ごとをとらえる視点は役立っている。会議の進め方や要領を押さえた発言、筋道だった説明などに活かしている。また論文執筆の経験も生かされ、情緒的な文章表現が論理的な記述に近づいたと思う。読んでくれる他者からも書き方が変わったとの意見をいただけた。

漠然とした疑問が明確に

学問を通しての仕事を振り返ると、当時、仕事の進め方について、漠然と意に沿わない印象を持っていたのが、確信として矛盾点に気づくことができた。真剣になればなるほど、増えていく業務量に押されて、あまり考えることをしなくなっていた当時を振り返り、問題点や矛盾点を明確に認識することができた。

3. 大学院教育の課題

ディスカッションする場が希薄

大学（院）は「真理の追求」をするところで、自分の研究テーマに沿って自分で勉強するという理解でいるが、それでもディスカッションできる機会が少なかった。自主ゼミを作るよう先生がアドバイスしてくれたが、その立ち上げなど初期段階の助力がほしかった。先生方は忙しくて会う機会が少なかったり、中には権威主義的な印象からとっつきにくさを感じる方もいた。社会人だから自主的にやるのが本当でしょうが、お互いに議論を交わす場がもう少しあってもよいと思う。

大学院のイメージが抱ける宣伝を

「大学院とはどんなところで、どんなことができるのか」といったことがわかるよう宣伝したほうがよい。公開講座など、オープンにした講義で具体的なイメージがつかめるのではないかな。

福祉現場の勉強会を大学院が支える

以前、職場で具体的なケースを取り上げ自主的な勉強会をしていた。こうした場に先生が来て話をするような機会があってもいいと思う。卒業生などがそのパイプ役に適していると思う。福祉の現場で悩んでいる人は多いだろうし、大学院が現場の勉強会など関わることで、現場の人たちは冷静になって仕事に取り組むことができる。そうした需要は多いのではないかな。

大学院の学びに修了生を活用する

私のように退職している者は別として、多くの人が仕事をしながら大学院を修了していく。そうした人をゼミや講座に呼んだりしてはどうか。実践する上でも研究するうえでも互いに蓄積していけるのではないかな。

4. 小括

Cさんは現役の福祉従事者ではない。しかし、入学動機は現役時代に抱いた生活保護業務に関する疑問にある。受給者の多様化や抱える問題の複雑化の一方、保護適用に感じる矛盾といったものがその内容である。

学びの成果として、Cさんは自ら抱いていた疑問の明確化やそれに対する論理的思考をあげる。過去の仕事について、客観的にあるいは達観的に振り返ることができたということだろう。

Cさんは「真理追求」の場であり「自分で学ぶ」場として大学院をイメージしている。自己完結指向とも受け取れる反面、ディスカッションの必要性を強調する。先生や院生仲間が議論を交わすことで研鑽することを望んでいるようだ。議論を交わすことへのこだわりは院内にとどまらない。修了生が大学院に出向くだけでなく、福祉現場に大学院（先生）が出向くといった、福祉現場と大学院との双方向関係をイメージをしている。

1. 大学院進学の動機

心の動きを学びたかった

教職の立場にあり、生徒や教育現場には心という面が欠かせない。生徒を育てるには心という面（に着目すること）が絶対に欠かせないと思う。教員の場合、1対1ではなく1対40とか、大勢の生徒との間に双方向のコミュニケーションをはかるには、心の面が重要だと思っている。

2. 大学院での学び（研究）の成果

生徒との良好な関係構築

心理専攻では「相手の心を、言葉を受け入れて、その上でこちらの意見なり考えを言う。まず聴くということ」を学び、生徒との関係がかなりよくなった。生徒のアンケートで「わかってくれる先生」の上位という結果を得た。

大学院は自分の業務行為を見つめなおすところ

大学院は日常の職場と違い、全く別な非日常的な刺激がある。同じ職場に長くいると客観的な見方ができなくなり、自分のやり方、考え方が一番いいと思ってしまいがち。大学院という全く違う環境に身をおくと、自分の本当の姿がわかり、問題点の認識もできる。その意味では、学部から進学するよりも、社会人経験を経てから入学する意味は大きい。

3. 大学院教育の課題

通いやすさが条件

通学負担を考えると通いやすさが大切。私の場合、通勤途中で大学院に通えるルートだった。職業をもっている人の場合、働きながら通うため、場所的な条件は大きい。これが美浜キャンパスだったら、入学は考えられない。

先進地、実践者から学ぶ

講義だけでなく実際に現場に行き、その実践者の話を聞く機会があってもよかった。

資格取得ができるカリキュラムを

純粋に学ぶ、研究することで満足する人もいるだろうが、上級資格が取得できることも含め、資格というのは一つのポイントになるのではないか。高度専門職といっても、証明があるわけではなく、世間にアピールするものが必要だ。

修士課程を修了した。その次の研究会やシステムを

福祉分野では、修了者や一般の人が参加しやすいテーマの研究会、講演会が多いが、心理分野ではあまり見ない。個人的には機会をとらえて参加するようにしているが、それは本校大学院ではない。修士課程を修了し、その2年間で土台にしてさらにステップアップできる研究会やシステムがあるといい。できれば定期的に。

修了生は資源である

修士課程2年間で大学院としての役割は終わりではもったいない。修了生の中にはエキスパートの人もいだろうから、大学院から見れば資源であり、教材である。修了生を引き止めておく仕組みを考えてもらいたい。

4. 小括

Dさんは高校教員であり、心理専攻の修了生である。1人の教員が多数の生徒に対する時、生徒の心理把握の必要性が動機となって入学した。

その成果は、生徒のアンケート評価に示されている。成果は生徒からの他者評価だけではない。「大学院は日常の職場と違い、全く別な非日常的な刺激」があり、「自分の本当の姿がわかり、問題点の認識もできる」というDさんにとって、大学院での学びは自己変化を促したものだといえる。

大学院の課題にあげるものは、通学のしやすさ、実地による学習、学位とは別の資格取得制度といった現役院生に対するものと、修了生を資源とした活用視点や修了生に対するフォローアップ的な取り組みを指摘する。

⑤ 被調査者 Eさん

1. 大学院進学 of 動機

・前よりも、何か勉強したいと思って来た。

2. 大学院での学び（研究）の成果

① 講義

・講義は自分の世界、意識も広がるし、知らなかったことが「そうだ」って思え、来てよかったと思えた。仕事場では出会わないような先生たちからのお話が聞け、自分の中ですれだけでも意味や価値のあることだった。変な言い方をすれば、自慢できる。

② 教員の姿から学んだ

・話し方、進め方、教材の作り方、人に見やすいものの作り方が一つ一つ勉強になった。言い方や知識も仕事場で活かせる。調べ方や、公式も、やっぱり先生は本当にすごい。自分と違う方向からの情報をくれるので、世界が広がる。

③ 異分野の人たちとのネットワーク

・院生とのネットワークが広がった。専門外の院生に1回電話で相談をした。専門職で大学院出だから、聞く相手としてもいい相手だと思う。

・職場の人から羨ましがられ、異分野の人達に出会えて大学院に行ってよかったと思った。

④ 文章を書く力

・文章を書く点ですごく役に立った。論文には、背景、目的、結果、考察という流れがある。現場も一緒に、ある背景のもとで目的をもって事業をし、実践結果が得られて、自分で評価をして次につなげる。この流れは失敗しても振り返れる。仕事をする上で役立った。

⑤ まとめる力

・「これが一つの案だよな？」というのをまとめることができる力は、前よりは身に付いていると思う。福祉の世界は答えがないので、これは一つの案だよという形となるが。

3. 大学院教育の課題

① まとめる力を身につける

- ・社会人は1人で働くわけではないので、大勢の考えをまとめる力が身に付けばいい。
- ・福祉で働く基礎的な知識は学部を出て就職する。現場では上下左右いろんな考えがある。福祉は、人間対人間なので、多数の考えをまとめる力が身に付けばもっと場がよくなる。
- ・社会人を何年か経験して大学院に来るとたぶんその力があればすごく役に立つと思う。

② 場と離れて大学院で学ぶ意義

- ・大学院で学ぶと考える力が必要だ、自分には考える力が足りない。

③ 組織のトップを担う人材の育成

- ・大学院に組織のトップを育成するプログラムがほしい。
- ・職場では、一人が勉強していても、トップ自身が勉強していない。トップを育成知しなければ良くならないと思う。
- ・自分が現場を制御できるような位置にある課長級、係長級の人たちに、気づいてもらえるものを学んで、職場に生かしてもらえれば、少しずつ変わってくるのかなとは思う。

③ 人材養成のプログラム

- ・オールマイティーな教養、知識を持てる大学院プログラムがあつたらいいと思う。

④ 修了後も刺激を受け続けることのできる場

- ・日福は、夏期大学院や公開ゼミナール等、興味あるものに参加していれば十分だと思う。先生も会えるし、学校を見るだけで刺激が戻るのを続けてもらえればいいと思う。
- ・修了生は、もともと頑張る人たち。上を知りたいという心、知識が欲しいという方たちばかりだと思うので、修了生を対象に何かをするというのもいいと思う。
- ・(ケースメソッドは)、発言する練習や話をまとめる練習もできるし、いろんな考え方を聞き取ることができる。また、「こういう考え方の人もいるんだ」ということが分かる。さらに、まとめる、進行する立場になったりするので、いろいろ学ぶのにはいい方法、いい技法だと思うので、修了生対象でもしていただければいいと思う。

4. 小括

Eさんに関して、大学院入学動機はあまり聞き取りができなかった。ただ大学院に来る前より何かを学んでいきたいという気持ちが強く感じられる。

①～⑤の成果が語られたが、ふたつにまとめられる。まずは、大学院に来ることで教員・院生仲間等との関係ができ、その関係の中から得られたものが大きかったという点にある。

次に、実際に職場で役に立つ力を得られたという点である。大学院で、ゼミや論文を書くことを通して、書く力やまとめる力が身につきました、論文を書く流れを現場に置き換え、大学院で学んだことを現場に活かせるようにつなげて考える意識が感じられた。

そのため、大学院教育の課題については、現場で本人が感じている疑問や課題を大学院教育のプログラムへの意見としても出されている。また、それとは別に「大学院の修了生は、がんばる人」と表現し、修了生を対象に修了後も刺激を受け続けることができる場として大学院に期待を寄せている。

1. 大学院進学のも機

特記事項なし.

2. 大学院での学び（研究）の成果

ゼミの共同研究のフィールドで、多くの有意義な経験を得た.

寒い季節、実地研究として要介護認定調査で高齢夫婦世帯を訪問した際、灯油を買えずストーブを使えないという事例に出会った. 現地の同行職員から「これが国民年金だけの世帯の生活水準」と知らされ、貧困実態を学ぶ貴重な経験を得た.

文章の書き方、言葉の使い方は、実習生指導などに役立っている.

論文を書くにあたって「てにをは」など、書き方指導をいただいたことは、職場に来る実習生への指導や職員の記録の書き方指導などに役立っている.

近接領域の専門職の視点や用語の違いを知り相互の仲介的な役割ができるようになった.

修了後、職場の転属があり、パラメディカルな人たちとともに中間管理職として仕事を進める立場になった. そこには福祉職はもちろん、心理士、PT・OT、ドクターなどが存在し、意思疎通が難しい場面があった. そうした職種による見識の違いや使用する用語の違いがあることは大学院の学びで知っていたため、「お互いの通訳ができるような立場」に立つことができた.

実証的な研究の仕方を学んだことは、業務で観察する際、客観性の保持に役立っている. 部下を指導する際にも有用である.

実践研究という、実証的な研究の仕方を学んだことがバックボーンとなり、観察することの客観性、具体性を実習生や部下に指導しやすくなった.

分析的な意識で具体的な事実を正確に記録する.

福祉が科学たりえていないと感じていたが、具体的な事実を正確に残していくことを追求する必要があるのではないと思う. ある集まりの中から一人が去った時、これを「しばらくして去った」とするのと「5分後に去った」と記録するのでは、情報の意味が違ってくる. 5分というデータがあれば、次の集まりには10分を目指そうという目標設定ができる. 分析的な観察意識や事実を具体的に記録するといった大学院での学びが背景にある.

3. 大学院教育の課題

書籍が貧困.

最近はずいぶん整ってきたようだが、私が院生の頃は資料を探すのが大変だった. この建物（名古屋キャンパス）ではほとんど手に入らない. 本というのは研究の出発点だと思うのだが、あまりに貧困だった.

ゼミなどの機会に討論する時間、ロールプレイする時間があってもよかった.

理解能力に障害をもつ利用者に対し、施設のルールなどを伝えるとき、しっかり伝えることが難しい時がある. コミュニケーションする力というか、場面設定して訓練するロールプレイや一定のテーマについて、ゼミなどで討論する機会があってもよかった.

4. 小括

Fさんにとって実証的・分析的な視点といった大学院での学びは、現在の実践に有意義に活かされている。それは職場の部下や実習生への指導、あるいは多職種間の疎通といった面に表れている。正確な事実把握を根拠として分析する視点は、まさに研究的である。

このような成果を語るFさんであっても、ロールプレイを例にあげるなど、大学院に実践指向を求めている。また書籍の充実を指摘していることを合わせて考えれば、研究手法の実践転用を思考しているのかもしれない。



－聞き取り調査の様子－

※(注) 89 頁に同じ

1. 大学院進学の動機

①現場での経験を経て大学での学びの延長

- ・大学の学部で先生から、大学院の進学を薦められていたのが理由の一つとしてある。
- ・福祉系の大学だが、結構さぼっていたので、新たに勉強したかった。経験値的なものを、形式知にという実証研究をちょっとやりたい気持ちを漠然と感じていた。

②自分が置かれている立場と課題に気付き

- ・30歳過ぎて現場では中堅となり、中間管理職やリーダーシップを取らなければいけない立場になったときに、生半可なプライドや自信を持ち過ぎて、根拠もなくほかの人の意見を聞き入れない自分に気付き、キチンと勉強したいと思い大学院に入学した。

2. 大学院での学び（研究）の成果

①ゼミを通して獲得したもの

- ・指導や、研究や、仲間との触れ合いで、違うものの見方を素直に捉え学ぶことができた。
- ・現場にいと、狭いスポットで見てしまうが、拡大鏡したり引いてみたり、角度を変えたり、いろんな視点の持ち方について、勉強になった。
- ・何かを一緒にやったことで、チームワークができ、相互の学び合いができた。
- ・ピアレビューを毎月自分たちで行い支え合った体験が貴重で今もつながっている。

②文章を書く力の向上

- ・日常業務で記録を書いていたが文章が苦手で、いつも先生に「てにをはがおかしい」と直してもらった。なんとなく文章を書くのが楽しく、書き方が分かったように思った。

③客観的なものの見方

- ・現場では利用者や家族、事業所など周囲の人たちに入り込む仕事なので、見えなくなってしまう傾向があった。大学院で学んで冷静に分析したり、客観視できるようになった。

④相手に合わせた伝え方

- ・現場では、言葉で伝えても自分で伝えているつもりになっている話が多かった。
- ・大学院で学んで、論理的に話せる力が少しだけ身についた。また、利用者さんや学生など相手の状況や持っている情報の量や能力などを考えて伝える術を持つことができた。

3. 大学院教育の課題

①修了後もと少し違ったものを得る場に

- ・大学院は、修了後も現場の延長線上にあって、今までとは違うものの見方や違う技術や違う立場で考えたり、ほかの領域のところに広げて考えるいい機会や場であってほしい。

②大学院で学ぶ機会の折り合い

- ・大学院で学ぶ対価が、あまりにも安かったら頑張っやろうという意識がなくなってしまうかもしれないし、逆に高すぎると、やりたいという気持ちのある人がなかなかそのラインに立てない。意欲や力を持っていて、大学院に進学すべき男性の方々でも、やはり家庭や経済状況で断念している。解決策はないものか。

4. 小括

Gさんの大学院進学動機は学部教員の進めや中堅職員となった自分のステップアップにあった。大学院で得たものは、チームワーク、客観的視点、多様なレベルの人々への意思の伝達方法であった。修了後に大学院に期待しているのは、講義や教育ではなく、現場の諸問題を持ち込んで一緒に改善のヒントを得たいというマネジメント力交流の場や機会としている。大学院進学潜在要求の高さと経済的・時間的障害の軽減も提言している

1. 大学院進学の動機

① ケアマネージャー業務の中での壁

・ケアマネージャーをやっていたが、「マネジメントとは何なのか」ということをしっかりと学ぶ機会がほとんどなく、実践のなかで壁にぶつかってしまった時、大学院に「福祉マネジメント」専攻があることを知って決意した。

② 自分のイメージと大学院教員とのズレ

・マネジメントを教えてもらいたくて入ったのに、研究論文を書かなければならないと言われ、イメージが違った。研究者になる道は全く考えてもいないし、自分が興味のあると書き始めると「それでは論文にならない」と言われ「もう何なのだろう」と思っていた。

2. 大学院での学び（研究）の成果

① 根拠を示すことができる力

・論文を書くというのは、根拠を明らかにしないとイケない。なぜ、根拠を述べるのかが常に問われるが、根拠を示す力がある程度身につけることができた。

・会社のトップになったり、対外的な仕事が増える中で、自分の言葉に責任を持ち、「自分の発言」や、「自分の考え」の根拠を示せるようになった。

② 周りの人を頼ること

・（修士）論文を書くときに、全く何もわからない中で、先生に一から教えてもらい、仲間の人と夜中まで話し合い、わからないことは人に聞いてもいいのだと実感した。

③ 理論と実践をつなげて理解する力

・「マネジメント」について理論立てて理解できた。大学のときも福祉の理論とかを学んでいたが、それはやっぱり現場で仕事をしていることと、やっとそこでつながったみたいで、「あ、こういうことなのだなあ」と直結してずっと入ってくると感じた。

④ 違う視点で物事をみる人たちとの接点

・現場だけ見ていると視野が狭くなり、同業の方と話をしても愚痴ばかりで、話が全然前に進んでいかない。視点が違う人たちと話をすると視野が広がりためになった。

3. 大学院教育の課題

① 個々の学びたいという気持ちの発掘

・個々が学びたいと思う気持ちを発掘してほしい。講座でも必要でなければ行かない。

② ネットワークづくりの場として

・自分は、ケアマネジメントの技法の追及よりは、ネットワークをつくるために大学院があると思っている。テクニックだけでなく、ネットワークの場となってほしい。

・自分が興味あるテーマの研究会とかに行くと、同じような興味を持っている人が来るだろう。そこで何を教えてもらえるかというよりも、どんな人が来て交流できるかという方にどちらかというと興味がある。

4. 小括

Hさんは、ケアマネジメント業務の中で、壁にぶつかっているときに大学院生に出会ったことが直接的なきっかけと語られている。ただ、大学院進学の動機を語る際、自分が持っていた大学院のイメージと実際とのズレに関して強調していた。実際に研究をすすめていく上でも、このイメージのズレが尾をひいているように感じられる。

大学院での学びの成果に関しては現場の体験と理論を結びつける体感をしている。現場での経験を積み、大学院で学ぶことで実践と理論を結びつけて理解する力が出てきたと述べている。また論文を書く経験を基に根拠を示す力が仕事に生かされていることが分かる。

大学院教育の課題として、個々の学びたい気持ちを引き出すことの必要性を指摘している。必要だと感じれば行くし必要でなければ行かない、惹きつけるテーマの設定を求めている。また、本人は技法や何かを教えてもらおうというよりは、ネットワークづくりの場として大学院に期待している。これは、ネットワークいう面で、大学院で得られた成果としてあげている「周りの人を頼ること」とも少なからず関係があるように思われる。現場の体験と理論を結びつける体感をしている。

1. 大学院進学の動機

介護事業所の設立のため理論を学びたかった。

会社を退職し数年が過ぎ、妻がヘルパーをしていたことから、介護事業所を立ち上げようと思った。しかし実際には何も分からないため、まず理論を学びたいと思って入学した。

同業以外の分野との人脈を広げたかった。

介護事業所はケアマネージャーや他の事業所、社協や医師会などにつきあいができるが、それだけでは狭い。福祉でもさまざまな分野の人たちとつながりをもちたかった。

2. 大学院での学び（研究）の成果

利用者の抱える問題に気付く

社会人大学院に行く人の多くは実践経験をもっているが、私の場合は事業を開始する前にいろいろなことを知ることができた。そのため、理論と実践がつながったというか、利用者が抱える潜在的な問題に気付くことができた。例えば、高齢者虐待について判別視点みたいなものがなんとなく身に付いたと思う。

つきあいの広がり具体的な効果

学びとほぼ同時に事業を立ち上げたことで、いろいろな分野の人と出会え、それが今の事業に役立っている。ほかの業者と自然に相談や検討ができるようになり、それがまた人脈の広がりにつながっていく。他県で障害者の自立支援をしている NPO 法人ともつながることができ、そこから来た障害者の人に社員として働いてもらっている。その人たちには、介護保険でできない仕事、靴磨きとか、草取りなどをやってもらい、給料は非障害者と差別していない。珍しい事例だといわれることがあるが、私としてはそう思っていないし「何ら支障がないんだったらいいじゃないか」と。

事業所母体による認識相違を実感した

仕事から、居宅介護支援事業所とのつきあいがある。その母体は病院や社協、あるいは薬局など。例えば薬局の場合は、ケアプランだけやってヘルパーをやっていない。そうすると実際の介護というのがわかっていない。社協の場合だとヘルパーもやっているの、実際のところがわかる。私の事業所では、利用者に変化があると細かいところまでケアマネに報告するが、それを喜ぶ事業所とそうでない事業所がある。複合体っていいのか、そうしたいろいろな事業をやっているところは、実際のところがよくわかっている。

3. 大学院教育の課題

心情的理解を超えるもの

私の事業所のヘルパーで、予防給付の利用者に対して介護しすぎる人がいる。利用者自身ができることを代行してしまうので予防効果にならない。ヘルパーは「かわいそうだから」と代行している。こうした傾向はベテランのヘルパーに多い気がする。かわいそうということとは別の問題で、こうしたことを大学院で学べるといいと思う。

専門用語や英語が多くてわからなかった

私のように福祉分野の経験もなく、第二の人生で介護事業を始めようとする者にとって

は、言葉がわからない。専門用語というか、英語というか、それらが多くて、正直分からなかった。用語解説を入れるとかすると、不安は和らいだかもしれない。

パソコンの必須制は負担

私のような年代の場合、パソコンをやらない人も相当数いるのではないか。入学ガイドンスだったか定かでないが、ある先生がパソコンが使えないと駄目だ、というような発言があり、門前払いのような印象を受けた。先生とのやり取りで「メールに添付して送って」と言われても、戸惑ってしまう。ある程度の年齢で、漫然と勉強したいと思っている人は多いと思う。こうした人たちは資金的に入学は可能でも、こうしたところで躊躇しているのではないか。

4. 小括

Iさんは介護事業所の立ち上げにあたり、福祉を学びたいという明確な入学動機をもつ。大学院での学びと介護事業をほぼ同時進行で行ってきたため、インタビューでは、大学院での学びに関するものと自身の事業に関するものが、混同して回答する場面が見られたが、それはIさんにとって分離したものではなく統合された理解なのであろう。

その動機は、Iさんの事業展開に有意義な成果を及ぼしたようである。高齢者虐待という、ともすれば既成概念でとらえがちな問題に対し、「判断視点」が習得できたこと、事業所間の情報共有について経営母体によって差異があることなど、大学院での学びが介護事業経営の中で、ある程度活かされていることがわかる。また、介護事業所で障害者を雇用するといった先駆的ともいえる試みを学びの成果として述べている。

大学院教育の課題としてIさんが強調したのは、PC操作と用語の難解さである。いずれもIさんの経歴に起因するものであろうが、大学院での研究を退職後の学びの機会としてとらえた場合、PC操作の支援や用語をわかりやすく教える工夫などは、あながち的外れの意見としてとらえるわけにはいかない。

1. 大学院進学の動機

・「年を取ってからなぜ勉強に行くの」と主人から言われた。私は「病院で働くなら、もう少し広い視野を身につけて患者さんや家族のお役にも立ちたいので行きたい」と言った。

2. 大学院での学び（研究）の成果

① 学部とは違った学び

・学部は美浜の日福だったが、その4年間とはまた全然違うものだった。講義は講義で、とても役に立った。役に立つというのは、実際に現場で役に立つということ。

② 論文を書き看護プラス福祉を学んだ効果

・今まで論文を苦勞して書いた経験がないため、先生にご指摘をいただきながら、完ぺきではなかった後悔もあるが初めて自分で全部執筆し勉強になった。

・看護職だけでなく、社会福祉を学んだ効果として、自分がかかわった方々にアンケートを取ってまとめができた。

③ 異分野の人たちとの交流で自分の分野を客観視

・福祉系のケアマネさんとの直接のやりとりも多い。研究会には時間が許す限り参加したので、自分も学びつつソーシャルワーカーから医療面で相談を受け助言ができた。看護職の悪いところ、いいところ。ソーシャルワーカーのいいところ、悪いところが分かった。

④ 教員とのつながりと活用

・忙しい先生なのに無理やりお願いして、横のつながりを生かし活用させていただいた。

3. 大学院教育の課題

① 博士課程に行かなくてもプラスの学びを

・博士課程に進もうと思ったが、「そこまでやるエネルギーがない」と引いてしまった。

・実践をまとめて何かに発表したいが、修論で身に付けた力を活かしたい。

・大学から依頼された実務家教員（リレー講義）をやり少し自信が出てきた。

・事例検討など、テーマをもってやっていくには、誰かがリーダーシップを取りながら、年1回でもやらなければつながりは出来ない気がする。仕事に直結したものなら参加する。

② 医療的な分野の不十分さ

・自分は、医療職から福祉を学んだ。美浜の学部の医学概論を聞いたが福祉から医療を学ぶ部分が少ないように思う。医学だけを伝えるのではなくもう少し広い視点が必要だ。

③ ネットワークづくりの場として

・ソーシャルワーカーさんというのは横のネットワークを結構持っているが、他職種とのつながりは弱いと思う。1回社会に出てある程度ソーシャルワーカーとして実践を重ねた後、もう一度、あえて勉強し直すことはすごくいいことだと思う。機会があれば大学院へ行くように進めているが、大学院としてもっとアプローチすべきではないか。

4. 小括

Jさんの、大学院進学の動機は看護職がより社会福祉をまなびたいというものであった。大学院で学んだ成果は、まず他職種との接点をもつことができ自分の分野を客観視できたこと、また、自分が異分野である社会福祉を学んだことで成果が二重に現れたこと、さらに、講義等には実際に現場で役に立つ学びだったと述べている。

また、論文を書くという体験をはじめてすることができた点に関しても後悔はあるものの成果としてあげられている。博士課程に行くほどのエネルギーはないが、「せっかく修論をやったので、その部分で少し現在の中でやっていることを活かしたい」という言葉から大学院との継続的関わりを希望している。ただ、研究会や事例検討会に関しては、リーダーシップをとってくれるような人や組織に期待していることが分かる。本人は、大学院をネットワークづくりや異分野の視点を学ぶことができる場として前向きにとらえ、周りのソーシャルワーカーに大学院進学を勧め、大学院としての強いアプローチを提言している。



－聞き取り調査の様子－

※(注) 89 頁に同じ

1. 大学院進学の動機

自分の仕事を見直すため学びたかった

・大学院で学ぶ具体的テーマは未定だったが、最終的には、もう一度自分の仕事に戻って、しっかり自分の仕事を見直して、もう少し、安定的にいい形で展開させる力をつけるため学びたいというような気持ちがあった。

2. 大学院での学び（研究）の成果

①指導教員から学んだこと

・自分の考えが誤っていた場合、先生から率直に「違うのだよ」という厳しいご指摘をいただくことができた。そういう指摘をいただくということがないためありがたかった。
・研究に取り組む姿勢、ものの考え方や文章の書き方細かいことまで教えていただいた。

②人脈の獲得と維持

・同じゼミ生や、大学院教員の方たちとつながりもあり、いろいろな情報を得る機会が増えた。困ったときには助けていただける。幅広い分野の方ともお話しする機会が増えた。

③冷静に先をみる視点

・研究で少し本も読むため知識も増え、現場のその日暮らしでなく今後が少し見えるようになった。以前は感情的になりがちだったが、少し冷静に見ることができるようになった。

3. 大学院教育の課題

①総合的にみることができる力の取得

・講義を一方的に受けるのではなく、そのあとにもう少し現場の事について踏み込んで考えられる場があったらいいと思う。福祉をきちんと学んできていない方もいるので…。

②現場の大学院への理解

・自分の進学は当時の施設長に理解されたが、大学院に通うことで、何かあった場合に「他に力を注ぐ前に今の仕事を一生懸命やりなさい」と言われる。職場の理解はとても大切だ。

③個々のレベルに合わせたカリキュラムを

・先生方は、ある程度の知識を持った人が大学院に入ると思っていないか。最初のガイダンスで「先行研究を 20 本集めなさい」と言われても、「先行研究って何だ？」というレベルの人もいるので、そういう人のために多少は準備講座などがあるといい。スタートで遅れても修了するまでにだんだんとわかっていく感じ。全然知らずに入ったのは自分だけかもしれないが、幅広く募集するのであればそういうことも考えてほしい。

④大学院に足を運べるような環境整備

・科目履修など全部を履修するのは難しいので、1回は聞けるシステムや回数券などもう少し気軽に大学院に足を運べるシステムがあるといいと思う。自分の場合は、幸いに先生に「今日は聞きにいらっしゃいよ」とか言われて、ありがたく聞きに行けた。

・鶴舞へ来ても、修了生は本を借りられるが、文献を取り寄せはできない。図書館で文献を寄せできるとか、一般の人よりちょっと特典があるといいと思う。

⑤修了生を大切に

・新しい人を開拓するのも大切だが、修了した人もやはり大切にしていきたい。自分も知人に薦められて入ったので、修了した人が薦めたいくなるような大学院をと思う。

4. 小括

Kさんは、大学院進学の動機を自分の仕事の見直しと述べ、具体的テーマは未定で漠然と大学院で学びたい強い気持ちをもって入学したという。得られた成果として、教員や院生同士のネットワークという面に加えて冷静に物事をみることができる視点の獲得を挙げ、大学院での学びが現場で仕事をするにあたってある程度活かされたと述べている。

同時に、大学院教育の課題への意見が強く出されている。①個々のレベルに合わせた準備講座の希望である。広く人を集めるにあたっては配慮が必要であることを提案している。

②修了生を大切にすることに関しても強調している。修了した人が薦めたいくなるような大学院を希望している。大学院に足を運びやすいような環境整備をすることがあげられているが、それも修了生を大切にすることにつながっている。

現場の大学院への理解が、得られないと大学院で学ぶことは難しいと指摘しているが、論文を書き上げたあと「現場の事について踏み込んで考えていけるような力」を現場で発揮することや、見直す機会を得るという期待をもっている。

1. 大学院進学の動機

大学教員の誘いがあり、学位取得が必要だった

入学と同時に大学教員になった。それ以前は病院勤務だったが、大学には職業人の教員として勤務することになったが、そこが専門職養成のところで、大学院修了やドクター（という学位）が必要だとわかっていたので、大学院に入学した。

マネジメントに興味があった

勤務していた病院はいわゆる療養型で、兼務でケアマネージャーもしていたので、マネジメントにも興味があった。

2. 大学院での学び（研究）の成果

研究の作法を学んだ

研究するうえでの決まりごとというか、細かいところまで研究の作法を教えていただいた。自分が論文を書けるかどうかは別にして、一応の講釈は言えるようになった。

根拠を示し納得を得られる力、わかりやすく説明し方向づけをする力

福祉の現場では、自分が一生懸命やって理想を実現しようとしているのに対し、現実には利潤追求であつたりとギャップがある。その葛藤が大きいと燃え尽き症候群になったりする。その中で自分の意見を通すことは難しい。やはり根拠を示して相手が納得するようにもっていくことが大切。意見を言っても「じゃあ、なんで？」と尋ねてくるだろうから、意見の根拠を理屈としてわかりやすく説明し、それを取り入れてもらえるように方向づけする力が必要。それは学んでいるとのそうでないのとでは違う。職業人としての勘と度胸でやる部分とそうでない部分の両方がないといけない。思いを形にするための武装としての力みたいなものかな？

調査の大変さを学んだ

自分で調査していかには大変かがわかった。幸い、福祉大は豊富なフィールドがあるため、そうしたものをに使わせていただくポジションにいることはとてもありがたい。この先も縁を切らずにつながってみたい。

学部からの進学者は社会人とのつながりができる

社会人が中心の夜間大学院で、学部から進学してきた院生たちは、同世代とは違う縦の人脈が広がる。社会人で大学院に来るわけだから、それぞれの領域である程度の活躍をしている人が多い。プラスアルファをもっている人たち。そうした人の中に現役の大学生が入っていくことはとてもいいことだと思う。

自分と違う目線・考え方を教えてもらった

自分の領域が、たとえば医療だったりすると、その目線でものを見ていた。大学院のゼミ合宿や指導教員から出される課題などを通して、いろいろな領域の課題やそれに対する解釈など、自分とは異なる目線というか考え方・とらえ方を教えてもらった。

3. 大学院教育の課題

指導教員の指導姿勢の特性と指導の定期化

修論提出日が近づいた発表会で、根幹から覆るようなことをいう先生がいた。それで調査を一つ加えることになり、調査結果が届いたのが修論提出の1週間前だった。がんばしい調査結果を得られなかったが、追い込んで書いた。プロセスをきちんと書けば研究になるとの助言をいただいた。先生によって指導についての姿勢が違うのはわかるが、最低のラインというか、やはり定期的な指導日などを設けることが必要だと思う。

修士論文の指導システムができていない。定期的な指導機会の確保が必要

指導する先生によって違うかもしれないが、論文指導がシステム化されていない。毎月この日が修論指導の日というように決まっていれば、否が応にも指導を受けられる。少しでも前に進むことができる。先生とどうやったら会えるか、どうしたら面倒をみてもらえるのか、絶えず考えていた。できたところから指導をするというのでは、なかなか進まない。私たちにも責任があるかもしれないが、どうすればよいかわからない。

現場の需要に直結する

大学院にきた社会人というのは、大学院でやっていることの何かを求めて入学したのだと思う。自分の仕事をアウトプットしたいとか、自身の興味関心をステータスアップしたいとか、何か思いがあって来ているわけだから、そうしたものと直結するような講義なり、演習なりをするのがいいと思う。大学院だから高度な研究機関であることは確かで、さまざまなセミナーやシンポジウムなどを開催していることは知っているが、職員の人たちのスキルアップになるようなものという、どうなのだろうと思う。在院生だけでなく、修了生を引っ張り出したワークショップなどを企画してもいいのでは？

4. 小括

Lさんの進学動機は大学教員としてステップアップするための学位取得が主目的であった。同時に現場経験を持つことからマネジメントを学ぶ動機が述べられた。

成果として、研究手法やルール、その経験からくる根拠の明示と説明力など、研究方法や能力といった個人の力量に関するものがあげられている。「調査の大変さ」も力量アップに通じるものとしてとらえ、研究や調査を行う環境について一定の評価をしている。

また、個人レベルの習得成果とは別に、他者とのつながりや自信とは異なる視点についてもあげている。とりわけ学部出身と社会人との関わりに着目した成果のとらえ方は、他のヒアリング結果ではみられない指摘である。

対して、課題に関する発言では、総じて院生に対する指導システムに集約されるのではないだろうか。指導教員の個性を認めつつも、それによって学ぶ側に発生する苦勞をあげ、「定期的な指導日」の創設といった仕組みについて言及する。対象が社会人であり、その内的な動機や興味関心に合致することを要件とし、修了生を教育資源と位置付けたカリキュラムについて意見を述べている。

1. 大学院進学の動機

- ・アンケートの項目にあるものは、動機としてほとんど当てはまらない。
- ・これまで書いたことがない論文を書くことが、自分の本当のテーマだった。

2. 大学院での学び（研究）の成果

①講義から学んだこと

- ・自分は、福祉職ではなかった。福祉のいろはからの部分から、全くもって知らない中に入ってきたので、そういう意味でも講義はためになった。

②ゼミという機会を得て

- ・ゼミの中で、自分の研究以外の部分でのやりとりや、教授からの指導などを通して、自分以外の研究の方法や違う視点を学びとてもためになった。
- ・自分には、福祉の人たちとの人脈が全くなかったの、大きな成果だった。

③論文を書くプロセスを通して

- ・論文を書くことが、自分の本当のテーマだった。研究テーマの見つけ方、研究の広げ方、捉え方など、いろんな意味で論文を書き上げたという事での学びは多かった。

④指導や指摘を受けてきた経験から

- ・従来の仕事の中では、「ここが悪いのよ」と、書いたものに対しての評価がなかった。
- ・研究論文を通して、いろんな形で「ここって？」というような指摘や、教授からもきちんとした指導が入ってくるというところで、その部分を得ることができた。

⑤相手に伝えられる力の取得

- ・今職場では、後輩たちを指導する側に立っているが、「何かこれを見てください」と言われたときに何が問題・課題なのか全部わかるようになった。大学院に入るまでは、文書化されたようなものに対して、根拠をもって評価できなかったが、言葉にして言うことができ、伝えられるようになったのは、自分の中の大きな成果だと思う。

3. 大学院教育の課題

①時間的な制約の中での学び

- ・自分の研究だけを書き上げた2年間だった。特に仕事が忙しいところから来ているので、十分に院生同士の交流などができなかった。

②教員との接点と議論を深めるための仕組みづくり

- ・教授などは、土日に来てもないからあまり（接触が）できなかった。
- ・忙しいとは思いますが、きちんとした大学院なら、研究室に教授がいて、自由に出入りをし何か議論をしてといった部分があるのではないかと思う。それが全くここ（日本福祉大学）では、ないので、これから考えていってほしい。「今はメールができていいる」といいながらも、メールの返事もなく悶々としているし、やはり理論は議論すべきなんだと思う。

③環境的な配慮

- ・福祉大の卒業式に初めて福祉大を見ただけで、「美浜の図書館も行ったことがない」人間なので、自分の範囲も狭いとは思いますが、日曜日閉まっている図書館は大学院らしくない。

4. 小括

Mさんの、大学院入学動機は、論文を書くことであり、大学院での学びの成果についても論文に関することが多く語られている。論文を書いたことがないところからのスタートで、研究というものが漠然と分かってきたという。

また、論文を書いていくプロセスの中で、指摘や指導を受けてきたことが現場に戻り、自分が指導する立場になったときに役立っている。なんとなく変だと思っていたことが、相手に言葉として伝えることができるようになったことが大きな成果という。さらに、自分の分野や研究だけではない人や研究にかかわる機会できたことをあげている。

大学院教育の課題としては、社会人大学院という面での配慮を考えていく必要があることを自分の経験から指摘している。具体的には、教員との接点の少なさや議論を深めるための仕組みづくりや図書館等環境への配慮をあげていた。

⑭ 被調査者 Nさん

1. 大学院進学動機

研修プログラムの幅を広げようと思った

自治体や社会福祉法人を対象に研修プログラムを提供するという営業していた。研修プログラムは自分で勉強をしないと幅が広がらないため、仕事に膨らみを持たせるということも期待し、半分業務命令もあっては入学した。

2. 大学院での学び（研究）の成果

教授法やレジュメ作成は刺激になった

履修した講義のすべてが私の専門分野ではないが、ある講義で用いられた教授法やレジュメの作り方みたいな部分は、非常に刺激になった。仕事で研修をする側だったので、非常に参考になった。

3. 大学院教育の課題

端的な指導と論文プロセスを教育するカリキュラム

修論指導では、それぞれの先生に得意不得意があり、意思疎通が難しかった。そのテーマで論文を書くのなら、この文献を読めとか、この文献をあたったかなどのチェックをもっと具体的にしてほしいかった。時間のないところで、一から文献を探すというのは非常に難しい。書いたもののチェックは頻繁だったが、そうした端的な指導がもっとあったほうがよかったのではないかと。私の場合、書きためたものを小出しにして終わったという感がある。研究方法が身に付いたかという疑問であり、出したものをチェックされるという繰り返しだった。書く前のプロセスは学部でやっているはず、とも言われたが、実際はそれほどやっていない。もうちょっと丁寧にそう指導をカリキュラムに組んだほうが良いだろうと思う。

福祉の現職者をターゲットとした講義

学部で行われるのと同じような講義が多かった。社会人大学院と銘打っていたが、学部

出身者もいたし、福祉畑ではない社会人もいて、焦点がさだまらない感じがした。福祉畑でない聴講者が質問し先生はそれに答えるが、現場をバリバリにやっている人間からすると、そんな基本的な質問するなよってという雰囲気になる。業界の人からすると、ずいぶんもどかしい。

実践の検証方法を充実し教育するべき

入学動機はさまざまだろうが、社会人大学院を標榜するのであれば、現職者をベースにすべき。それは実践の検証だと思う。院生の実践をきちんと検証できる能力が大切なんじゃないか。新しい援助技術にしても現場の実態を知らなければ、上滑りになるだろうし、自分の職場がどういうレベルで仕事ができているのか、をきちんと検証できる力が大事ではないか。マネジメントというと管理運営とのイメージがあるが、もっと具体的な実践の中身に着目したノウハウというか、実践研究といったものが薄かった気がする。

学んだことを現場に還元できる職員育成としての大学院教育

私の同期や近い人たちは大学院の卒業後、転職するパターンが多い。社会人が大学院で学ぶ場合、職場の理解が必要だと思うが、こうした風潮が広がると、大学院の進学を志望する職員は辞めてしまうのでは、という不安が職場や上司に生まれる。福祉業界は人材不足なので、大学院に行くことに理解を得にくくなる。大学院では、もともと研究方法を学んで現場に帰っていくというサイクルを目指していたはず。入学者が減少していると聞き、ビジネスとしての大学院、経営上の視点もあるだろう。そうしたことと折り合いをつけながらも、大学院の基本的な軸というか、現場に還元できるプログラムを用意しないといけない。人材を送り出す現場側にも、戻って来て活躍させるという認識、頑張って勉強して戻ってこいという認識が必要。

論文執筆にあたりゴールの明確な設定を

社会人で研究時間の確保が難しい反面、きちんとしたものを書きたい。あまり時間はないが要点を教えてほしいという気持ちはあった。しかし、学部出身者である院生の育て方といったパターンはあったかもしれないが、社会人を対象にしたノウハウはどうだったか。指導するうえでゴールを設定することが必要。ゴール設定にしても、院生の職場の状況をふまえて、できるところで合意するというやり取りを現実的にしないと。一方で（大学院は）ビジネスだから折り合いがつかないではないかと思う。学校として譲れない線があるとは思うが、（院生の環境など）個人差が大きく影響すると思う。

記録をテーマにした研究会

福祉業界では記録の取り方が弱いと思うため、継続的でなくてもプロジェクト的にそうした研究会があると面白い。

4. 小括

Nさんは自治体や福祉法人の職員を対象に研修機会やプログラムを提供する、いわば福祉人材の質的向上に関わる立場にあり、自身の人材育成能力を高めることを目的に大学院の入学した。大学院での学びは、教授法や資料作りなど、Nさんの目的に直結した成果が得られたようである。

そうした立場もあってか、社会人を対象とした大学院教育について、一定の基本的なスタンスを有していることがうかがえる。それは「福祉の現職者に特化した大学院教育」と

表現することができるだろう。研究に費やすことができる時間に制限があるという社会人の特性を前提に、実践の実証的な検証、研究のイロハ的なことよりも要点を押さえた指導、論文のゴール設定という発想といった、合理的な研究指導を主張する点から明らかである。また、福祉現職者が修了後、実践現場からかい離していくことに危惧を抱いていることがわかる。Nさんの業務が福祉人材の育成であり、そのために大学院で学び、ある程度の成果は得られたものの、現職者の育成に焦点化されていない教育体制を指摘しつつ、人材流出に警笛を鳴らす、といった「福祉の職業人養成のあり方」という視点で一貫している。

⑮ 被調査者 ○さん

1. 大学院進学の動機

講習参加で再学習の意欲が高まった

現認者講習を受講したことで現代の状況については理解できるようになったが、歴史や制度などについて、学び直したいと思った。

海外の研修会で刺激を受けた

海外研修に参加したことで、他の参加者に大学院修了者が多く、また研修で学んだ内容に刺激を受けた。

自子の育児負担が軽くなった

子どもが高学年になり、今なら大学院で学ぶことができるようになったと思った。もう少し子どもが小さいと無理だと思う。

2. 大学院での学び（研究）の成果

学びやすいカリキュラム

子どもが成長したといっても、夜間に週3回、4回と通えない。2年間で履修しなければならない単位数があるが、働きながら子育てし、かつ修了できたのは、集中講義や毎週のゼミなどがあったため。そういうカリキュラムになっていたからだと思う。

論文の書き方のいろはを学んだ

他の大学院で学ぶ知り合いなどの話から、論文の書き方のいろはを教えていただけたと思う。書けるようになったか、と言われればそうではないが、ゼミの仲間で助け合ったとか、小論文3本コースや3年で終了するコースなども選択肢があっことも自分にとってよかった。現場経験が長いため、現状把握や課題整理などは苦ではないが、先行研究にあたることやデータの分析、それらの交錯など、今も難しい印象はあるが、論文の書き方を学ぶことができた。

スタートラインに立ったことの自覚

自分が経験主義で仕事をしていたことがわかった。その意味では大学院の終了はやっとスタートラインに立ったという感じ。

質の変化が学生指導に役立った

現在は大学教員をしているが、実習指導などで学生の悩みをこちらで整理しながらアドバイスや道筋をつけることができるようになった。現場にいた時の後輩指導や実習生指導

とは、質が変わった感じがある。型どおりの実習ではなく、実習で行われることの意味を説明できたり、学生が考えるような問いかけができるようになったりした。

人脈が広がった

同じゼミの人たちとは今でもつきあいがある。その関係で、今の仕事を助けてもらったりもしている。

3. 大学院教育の課題

さまざまな専門分野にわたる教員をPRする

社会人で大学院進学を考えている人は多いと思うが、反面、自分が何を学びたいのか不明確な場合もある。多様な専門分野にわたる大学院の先生方をもっとPRするといい。こういう先生がいらして、どんな専門なのかが分かれば、研究という深い取り組みまでいかなくても、ちょっと進学したいと思っている人には有効だと思う。

ワークショップなど、集中できる学びの形態

他大学の先生がいらっしゃる宿泊型のゼミがあった。2泊3日で聞くだけでなく実践的な、ワークショップのようなもの。社会人だったから、この期間ぐらいなら参加できるし、ゼミの仲間との集中した議論ができてとてもよかった。こうした取り組みはもっと多くあってもよい。

整理・説明ができる専門職の養成

卒業し現場にいる学生（だった人）を支える体制に関心がある。大学院に来ると思いを熱く語ることができる。ただ、現場でも、物ごとを整理したり、道筋を立てたり、意見いったりできる能力は必要。しかし、そうしたものを先輩の背中から学ぶ時代ではない。中堅の人たちが、後輩に何を教えていくか、指導していくが大事だが、業務に追われて組織的にもいっぱいの状態。組織のありようも関係する。今起きていることをわかりやすく説明でき、やっている仕事の意味を示し、向かっている方向を伝えられる人。こうしたことができる専門職が必要だと思う。

研究生制度など、修了した人へのPR

修了した人でも何らかの形で大学院と関わっていたいと思う人は多い。研究生などは比較的安価で図書館が利用できるなどのメリットがある。こうしたことを修了生向けにPRしていくことが必要。

4. 小括

Oさんにとって、大学院への進学にはいくつかのきっかけや条件合致がある。現職者であったため現況はわかるが、そこに至る歴史的な経緯について学びの欲求をいただいた研修、海外研修では研修内容や他の参加者から刺激を受けている。また子育てが一段落し時間を作りやすいという環境変化も要因としてあげている。

子育て中のOさんにとって、選択幅のあるカリキュラムや体制は学びやすさにつながっている。論文作成に関する初歩的な学びを得たことは、「スタートライン」という認識を抱かせると同時に、学生指導するうえで、整理や意味の伝達などを伝えられるようになったと自己評価する。またゼミ仲間のつながりは、学生を実習生として送り出す際に、役立っているようだ。

整理や意味を伝えることは、現場の職員としても必要な力量であり、その任を担う中堅職員にとって、大学院という存在は有効であることをOさんは示唆する。ただし、社会人の興味関心は多様であることから、大学院の先生方の研究分野や内容をPR資源として活用すること、現職者の修了生につながりを保てる研究生制度のPRなど、新規の入学者や修了者の資源的活用について言及している。



－聞き取り調査の様子－

※(注) 89 頁に同じ

3. 聞き取り調査結果のまとめ

1) 聞き取り調査結果の客観性

聞き取り調査結果の内容は上述の「1, 聞き取り調査結果の要旨」「2, 聞き取り調査とその分析」の通りである。聞き取り調査の対象者は社会福祉学研究科福祉マネジメント専攻（旧称）の修了生 15 名と限界はあるが、修了年度ごとに無作為に抽出した 50 名に調査依頼した中での協力回答者 15 名であるため、回答にも修了期や入学動機などに偏りはみられず一定の客観性は担保された。また、大学院教育の評価に関わる調査でもあるため大学院教員は調査に加わらず、他の修了院生に調査員を依頼し個別対面式で行ったため忌憚のない評価を多数得られ、この面でも客観性は担保された。第一部アンケート調査による定量的データを聞き取り調査で質的側面から補強し「福祉現場と大学院の循環システム」構築に関するリアリティある基礎資料とするという目的も一定程度果たされたと思われる。

2) 聞き取り調査結果の考察

調査の 3 つの設問①大学院進学動機、②大学院での学び（研究）の成果、③大学院教育への期待に関する聞き取り調査結果から次のように考察することができよう。3 つの設問に関する回答から 2 点に整理して考察を述べる。

- ① 第一は、大学院進学動機と大学院での学び（研究）の成果の関連には共通性と相対的独自性があることである。

i) 共通性の側面

福祉マネジメント専攻への入学動機は、大別すれば④「論文を書く力を得たい」「学位所得」などステップアップを含む研究的志向と⑤「現場でのマネジメント力」をつけたいなどの高度専門職志向が混在している。動機は一見異なるが、調査結果では両者には大学院で学ぶ（他の学校でなく）という共通性が示されていた。動機面では、「現場の問題を学問的に見つめなおしたい」などの言葉で語られた。また学び（研究）の成果では、高度専門職志向の人も「論文には、背景、目的、結果、考察がある。現場も一緒だ。」「根拠を示し相手の納得を得られる力がついた。」などの表現で示されていた。さらに「研究的志向と高度専門職志向の違いや異分野の院生からの情報や教員との接点ができ世界が広がった」ことを成果として上げた回答が多く、動機や領域が異なる院生同士が共に学ぶ相乗効果が発揮されたとも言える。

ii) 相対的独自性の側面

聞き取り調査結果では、上記の共通性ととも相対的独自性も浮き彫りにされた。「現場の事について踏み込んで考える力」の獲得や「ケアマネジメント業務の中で壁にぶつかり、マネジメントを本格的に身につけたい」など高度専門職志向を動機とする修了生からは、前述の共通性に加えて、大学院教育を通して組織のトップマネジメントができる人材養成をして欲しいなどの要望が出された。方法としても組織のトップを育成するプログラムや

コミュニケーション力・プレゼンテーション力の訓練やロールプレイなど独自の要望である。他方、研究志向の修了生からは博士課程にすすめる「研究や調査方法論」も学びたかったという要望や教員の定期的な論文指導のあり方についての改善要望も出された。本調査と並行して、大学院は大学院G Pのとりくみを推進しその構想の一環として医療福祉マネジメント研究科を新設した。大学院G Pの成果を日常の大学院運営に生かし、入学動機が異なる院生が相対的独自性をもって学びあいたいという要求に応えることが期待される。

② 第二は、今後の大学院教育への諸々の期待として二つの側面が示されたことである。

聞き取り調査では、これからの大学院教育について出された諸期待は相互に関連し合っているが以下の学ぶ機能とネットワーク機能の2つの側面から示されている。

i) 第一の側面は、大学院における教育機能の強化への期待

第一の側面は、大学院教育を通して現場を変えられる力―即ち高度な専門職の養成を大学院に期待し、組織のトップマネジメントできる人材養成をして欲しいなどの教育内容についての要望である。教員による指導機会の充実や指導環境の改善、図書館や情報環境など物的な環境整備を含む教育機能の充実を望む意見である。

社会人の興味関心は多様であることから、大学院の先生方の研究分野や内容をPR資源として活用すること、現職者の修了生につながりを保てる研究生制度のPRなどの提言も寄せられた。少数ではあるが、07年度から始まった大学院G Pに関わった修了生からケースメソッド法や現場のロールモデルを学びあう講義や討論の教育機会を修了生にも開放してほしいという期待が寄せられている。大学院進学潜在要求の高さと経済的・時間的障害の軽減も提言された。

ii) 第二の側面は、大学院が修了生と大学院とのネットワークの場となる期待

第二の側面は、大学院は修了後も現場の延長線上にあって、学びや研究の継続、教員や修了生同士のつながりがもてるネットワークの場として期待する声である。

「現場の諸問題を持ち込んで一緒に改善のヒントを得たい」「異分野の人たちとのネットワークをもって視野を広げたい」「修了生を引っ張り出したワークショップなどを企画してもいいのでは」「研究会や事例検討会に関しては、修了生にも気軽に情報を流してほしい。修了した人が職場の後輩に日福大を薦めたくなるような大学院を希望している」。などの多数の期待が寄せられた。そのためにも「大学院に足を運びやすいような環境整備」「情報の日常化」「リーダーシップをとってくれる人や組織への期待」が寄せられた。